

# マイナー文学から 人間の普遍性を考える

# 研究

THE FRONT LINE  
of RESEARCH

アルジェリアという国をご存知でしょうか。地中海とサハラ砂漠に挟まれた北アフリカの大国で、首都アルジェは、対岸のフランスの港町マルセイユから飛行機で一時間ちよつとの美しい街です。東のチュニジアと西のモロッコとともにフレンチ・マグレブと呼ばれることがあるのは、この北アフリカ三国にフランスの植民地だった経験があり、独立後もフランス語が盛んに話されているからです。映画好きの方なら日本でも大ヒットした『アルジェの戦い』（1966年）をご存知かもしれません。国語はアラビア語ですが、数千年前からこの地に暮らす先住民はベルベル人と呼ばれ（自称はアマジグ）、この二千年ほどの間に、ロー

マ、ゲルマン民族のヴァンダル人、ビザンツ人、アラブ人、トルコ人、フランス人をはじめとするヨーロッパ人たちが次々にやって来て住み着きました。私はこの国の現代文学を専門にしているのですが、一体どうしてそんなマイナーな分野を研究しているのでしょうか。

コロナ禍を契機に、フランスの作家アルベール・カミュの小説『ペスト』が再び売れていると耳にします。彼はフランス統治時代のアルジェリアに生まれたフランス人で、『ペスト』の舞台もモロッコやスペインに近い西部の中心都市オランです。二〇世紀の前半から、このカミュのようにアルジェリアに暮らすフランス人作家たち

アはフランスではないということ、フランス語で書いていくことになり。興味深いことに、アルジェリアでもモロッコでもチュニジアでも、フランス語は独立後も生き残りしました。アルジェリアでアラビア語の長編小説が書かれるようになるのは二〇年遅れの一九七〇年代になってからですが、その後もフランス語による著述活動は続けられ、近年ますます勢いを増しているようにも見受けられます。



## PROFILE

鵜戸 聡

Satoshi Udo

国際日本学部准教授

専門：フランス語圏アラブ＝ベルベル文学

- 2004年 東京大学教養学部卒業
- 2012年 東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程修了 博士(学術)
- 2013年 鹿児島大学法文学部准教授
- 2020年より現職

### 主な著書・論文

- 『国民国家と文学』（作品社・2019年）
- 『クリティカルワード 文学理論』（フィルムアート社・2020年）
- カメル・ダーウド『もうひとつの『異邦人』』（水声社・2019年・翻訳）
- 『アルジェリアを知るための62章』（明石書店・2009年）

### 所属学会

日本中東学会、日本カミュ研究会、日本マグレブ文学研究会



アルベール・カミュ『ペスト』

私が最初にこの地域に興味を覚えたのは、アラブ人やベルベル人たちがフランス語という元来「他者の言語」を使って独自の文化を創造していることが不思議に思えたからです。やがて研究を進めていくと、これらの

国々ではフランス語は必ずしも完全な外国語ではなく、人々が日々の生活の中でアラビア語やベルベル語に取り混ぜながら使用している言語であることも分かってきました。さらにアラビア語は文語と口語に大きな違いがあり、同一言語の中にも複数の変種が含まれています。

雑に構築された「国民」について理解を深め、あるいはそこに生きる個人のアイデンティティを考えることでもあります。それは必ずしも遠い国の珍しい事例を研究しているだけではありません。文学作品が国境を越えて世界中で読まれるのは、同じ人間として私たちが理解しうる普遍的な経験がそこに描かれているからです。そして世界規模の多様さの中で個別の経験を吟味し、そこから人間一般について考察を深めていくことが人文学の使命だと思っています。

## 最前線

が活躍するようになります。彼らはバリのフランス人たちとは異なる自意識を持つようになり、スペインやイタリアなどからの移民も多かったため、まるで古代のローマ人のような、新しい「地中海人種」としての「アルジェリア人」を夢想する人たちも現れました。

やがて植民地末期の一九五〇年代には、アラブ・ベルベルの現地人作家たちが雨後の筍のように頭角を現し、自分たちこそが「アルジェリア人」であり、アルジェリ



カメル・ダーウド『もうひとつの『異邦人』』



アルジェリア・アラビア語版『星の王子様』